

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月8日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820016

研究課題名（和文） 近代オスマン国制史研究—正教徒共同体を中心に

研究課題名（英文） A Study in the constitution of the Modern Ottoman Empire: The Case of the Greek Orthodox Community

研究代表者

藤波 伸嘉 (FUJINAMI NOBUYOSHI)

東京大学・総合文化研究科・特任助教

研究者番号：90613886

研究成果の概要（和文）：

近代オスマン史を正教徒の視座という新たな切り口から検討するための基礎的作業として、トルコ・ギリシア両国で一次史料及び研究文献の収集を行なった。更に、2012年5月の日本中東学会年次大会と同年10月のギリシア共和国テッサロニキ市で開催された国際会議「オスマン世界」とで、それぞれ本研究に関わる報告を行なった。この間、本研究に関わる成果として、単著一冊、書評一本、書評論文一本、そして学界動向一本を執筆した。

研究成果の概要（英文）：

As a part of my overall effort in order to accomplish this project, in the years 2011–12 I have started extensive researches on the historical source materials on the Ottoman Orthodox Christians both in Istanbul in Turkey and in Thessaloniki in Greece. In addition, I made two academic presentations at the 28<sup>th</sup> annual meeting of the Japan Association for Middle East Studies (JAMES) in May 2012 as well as at the international congress called “The Ottoman World,” taking place in Thessaloniki, Greece, in October 2012. I have also published one book and three articles concerning this project.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：東洋史

キーワード：オスマン帝国、正教

## 1. 研究開始当初の背景

従来、トルコでも日本でも、また欧米を中心とした世界の学界でも、18世紀末以降

の「近代オスマン史」はほとんど「トルコ近現代史」と等価と見做され、そのため、往々にしてトルコ共和国成立に収斂する問題関心中で研究が進められてきた。これまでに公刊された代表的な「近代オスマン史」通史のほぼ全てが、事実上、「トルコ近代史」通史として叙述されており、トルコ以外の帝国構成諸国家への連続性を等閑視するものが多いことは、このような枠組みの存在を何よりも雄弁に物語っていると言えるように思われる。

これは逆に「オスマン史」あるいは「トルコ史」の文脈に限らず、旧オスマン領諸国各々の「民族史学」的な歴史叙述の文脈でも同様に当てはまる点であり、相違は、「善玉」や「悪玉」の配役が各国でそれぞれに異なる点に過ぎない。言うまでもなくこの際、非トルコ諸国の歴史叙述において、オスマン史は久しく悪しき「トルコ支配」として表象されてきた。

確かに近年、ナショナリズム論や帝国論の進展に伴い、こうした古典的「民族史学」は修正されつつある。そしてオスマンの多民族多宗教性に積極的な評価が与えられる例も少なくはなくなってきた。だがそれも、前近代における共存の称揚に留まる場合がほとんどである。だが当然ながら 19 世紀以降、近代においてもオスマン帝国は多民族多宗教的であり続けていたのであり、それを看過して、ムスリム・トルコ的な観点に拘泥するオスマン史叙述はやはり一面的なものに留まろう。

以上のような研究状況にあって、18 世紀末以降、オスマンがその中に位置する国際秩序と、それを受けた国内の統治構造との双方が、世界的な近代化・国民国家化の潮流の中で大きく変動する過程で、オスマン帝国治下諸民族の相互関係がどう変容したかという点については、結局のところ、民族主義の勃興とそれに起因する多民族帝国の「必然的」解体という語りを超えるものは見出せないのが現状である。しかも冷戦終結後、学問的関心の世界的潮流が大きく変容する中で、「宗派政治」論や「アイデンティティ・ポリティクス」論が隆盛を見るに至ったことは、事態を専ら民族・宗派集団の相互関係に還元してしまうことにより、ある意味、旧来の「民族史学」以来のオスマン史叙述の各国的分断を助長してすらいるように思われる。一時期流行したいわゆる「帝国論」においても、オスマン史側の研究動向の然らしむるところとして、真に多民族多宗教的な観点からオスマンの「帝国性」を論じたものはほとんどない。

つまり先行研究においては、近代オスマン国制はほぼ専ら、ムスリム・トルコ人が主導するものとしての国家及び政府と、その他の

被支配諸民族という二項対立的な図式で論じられがちだった。しかし実際にはオスマンは、前近代以来、正教会という、国家及び政府並びに国民多数派のそれとは一線を画すローマ以来の独自の帝國的普遍主義の担い手を内包していたことに、そして、その両者が互いに抱く非対称な国制認識にこそ、他の諸帝国と異なる特徴を有していた。正にそれ故に正教会は、18 世紀末以降の近代化過程で、オスマン政府と同様の形で、「世俗的」国民国家原理との対決を余儀なくされていた。

従って、近代オスマン国制をその総体として把握するためには、単に政府やムスリム臣民のみならず、正教徒など非ムスリム諸民族が独自に抱く広域的秩序像を踏まえた上で、それらの相互関係が近代化過程で如何に再編されたかを考察することが必要と思われる。

## 2. 研究の目的

申請者はこれまで、帝国最末期、1908 年の青年トルコ革命以降の第二次立憲政期と呼ばれる時期を中心に、近代オスマンの政治過程や思想潮流の研究を進めてきた。この課題についてのこれまでの研究成果は、名古屋大学出版会から刊行された、『オスマン帝国と立憲政』と題する学術書として公にされている。

そこで、この本に結実した従来の研究成果を踏まえた次の主題としては、以上の問題関心を踏まえ、オスマン国制の近代化とその過程での社会経済面での変容や思想的展開の構造的把握を、時期的にも地域的にもより広い視座から考察していくことを目指すこととしたい。

そのための具体的な切り口として、19 世紀後半にオスマン政府と世界総主教座、ギリシア王国政府と英仏金融市場、そして環地中海規模の正教徒商業網の結節点に位置し、正教徒共同体の中で寡占的な権力構造を作り上げていた大銀行家たち、とりわけザリフィス父子の言動の分析を中長期的な目標とする。

## 3. 研究の方法

以上に記したような研究課題は、ただ申請者一人にとってのみならず、世界のオスマン史研究、あるいはギリシア史研究全体の現状から考えても、余り類例を見ない新たな課題であるため、そのための研究環境は必ずしも整っているとは言えない。そこで今回の研究期間内においては、まずはこの課題実現のた

めの当面の短期的な戦術として、史料状況それ自体の調査を主眼にせざるを得ない。そしてその過程で、本研究に関わる個別的な論点を取り上げて順次分析していくことにより、それらの総体として、上記の中長期的課題の実現に繋げるという手法を取ることにしたい。

今回の研究事業中の短期的な計画としては更に、年二回ペースでの現地での史料収集と共に関連研究文献の読み込みを進めることで、今後も当面は継続するであろう本格的な研究のための足掛かりを築く一方、これまでの研究成果とこの新たな研究課題との繋がりについて、研究会発表や論文執筆を行なうことで、広く学界にその知見を還元しつつ、その間の溝を徐々に埋めていくことを設定した。

その際、トルコ共和国の首相府オスマン文書館に所蔵されるオスマン政府側の未公刊文書に加え、世界総主教座所蔵の公刊未公刊の各種ギリシア語史料、彼らの関係したオスマン銀行その他の金融機関の内部資料、そして当該期の定期刊行物や小冊子類をも参照していく。

#### 4. 研究成果

上述の通り、近代オスマン史を正教徒の視座という新たな切り口から検討すべく、特に銀行家を中心とする俗人名望家と高位聖職者とが織り成す 20 世紀初頭の正教徒共同体の権力構造の分析という中長期的課題に接近するための短期的課題として、本事業期間中には以下の研究成果を上げることができた。

まず、期間中、2012 年 8-9 月及び 2013 年 3 月の二度にわたってトルコ共和国イスタンブール市を訪れ、首相府オスマン文書館、イスラーム研究センター図書館、アタテュルク図書館を中心に、現地でなければ閲覧や収集の困難な一次史料や研究文献の調査を行なった。

この際、特に 20 世紀初頭のギリシア語定期刊行物と、オスマン政府の大宰相府の側が正教徒共同体の動向について残した史料との双方に関わる調査及び収集について、顕著な進展が見られた。ただしこの間、2012 年 3 月に首相府オスマン文書館が移転のため一時的に休館するという予想外の事態があったため、ただでさえ膨大な史料の所蔵を誇る同館での調査は、今後ともなお継続的に行なう必要がある。

他方、成果発表の面について言えば、2012 年 5 月に日本は東京の東洋大学で開催された日本中東学会年次大会と、同年 10 月にギリシア共和国テッサロニキ市のマケドニア大

学で開催された国際会議「オスマン世界」とにおいて、それぞれ本研究に関わる課題として、オスマン臣民たるトルコ語話者の正教徒のギリシア人歴史家、カロリディの歴史叙述の特徴についての報告を行なった。とりわけ後者の機会には、欧米やトルコ、バルカン諸国の研究者と活発な意見交換を行なうことができ、今後、申請者が自身の研究を進めていく上でも、非常に有益な経験となったと考える。

更にこれと並行して、下記に示す通り、単著一冊、書評一本、書評論文一本、そして学界動向一本を世に問うた。これらはいずれも本研究課題に直接間接に関わる内容を含んでいる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- 1 FUJINAMI Nobuyoshi, “Decentralizing Centralists, or the Political Language on Provincial Administration in the Second Ottoman Constitutional Period,” *Middle Eastern Studies*, 49, 2013. (査読あり、掲載決定済)
- 2 藤波伸嘉「オスマンとローマ—近代バルカン史学史再考」『史学雑誌』第 122 編第 6 号、2013 年、55-82 頁。(査読あり、掲載決定済)
- 3 藤波伸嘉「批評と紹介：エフィ・カネル『オスマン帝国からギリシア及びトルコにかけてのジェンダーの社会的要求：あるギリシア人キリスト教徒女教師の世界』」『東洋学報』第 94 巻第 4 号、2013 年、027-034 頁。(査読あり)
- 4 藤波伸嘉「2011 年の歴史学界—回顧と展望—西アジア・北アフリカ (近現代)」『史学雑誌』第 121 編第 5 号、2012 年、298-302 (920-924) 頁。(査読あり)

[学会発表] (計 2 件)

- 1 FUJINAMI Nobuyoshi, “Pavlos Karolidis, Ottoman Modernity, and the Vision of a Hellenized Empire,” *Balkan Worlds: Ottoman Past and Balkan Nationalism, at the University of Macedonia, Thessaloniki, Greece, on October 6, 2012.*

- 2 藤波伸嘉「パヴロ・カロリディのオスマン近代」、日本中東学会第 28 回年次大会研究発表、東洋大学、2012 年 5 月 13 日。

〔図書〕（計 2 件）

- 1 藤波伸嘉「世界総主教座とトルコ史叙述—C. アクタル編『歴史的・政治的・宗教的・法的観点から見た世界総主教座』に寄せて」三代川寛子編著『東方キリスト教諸教会—基礎データと研究案内（増補版）』上智大学アジア文化研究所イスラーム地域研究機構、2013 年、178-183 頁。（SOIAS Research Paper Series 9）
- 2 藤波伸嘉『オスマン帝国と立憲政—青年トルコ革命における政治、宗教、共同体』名古屋大学出版会、2011 年、460 頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

藤波 伸嘉 (FUJINAMI NOBUYOSHI)  
東京大学・総合文化研究科・特任助教  
研究者番号：90613886

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：